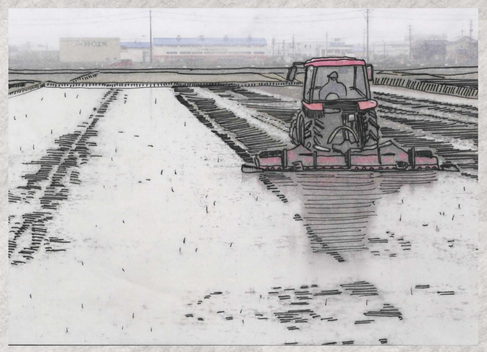
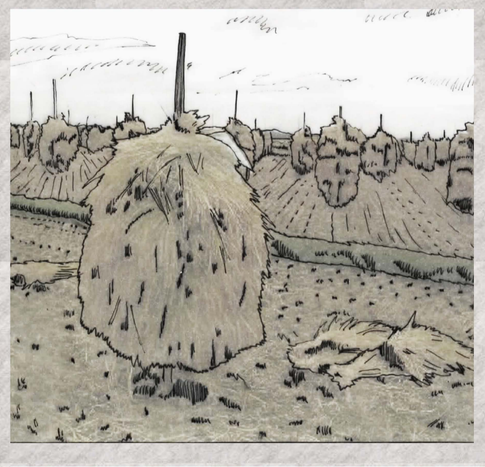




農業のすゝめ

農業人口の高齢化、世代交代による後継者不足によって
耕作放棄地が増加傾向にある。しかし農業を営む人々にとって
農地とは、先代から受け継いできたかけがえのないものであり
なんとかして守りたいと強く思う農家は多い。

一方、時代の変化とともに就農人口は減ったものの
新しく農業を志す若者達もいる。

そこで農地を守る後継者を必要とする農家の人達と
これから農業を志す若者を繋ぐ架け橋となる
一軒の小さなシェアハウスを設計する。

CONCEPT

農業を志す若者たちの集まる家

STORY

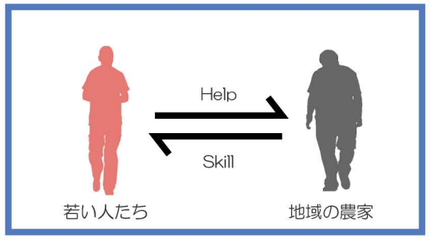
食材が育つ環境とは実に興味深く、また奥深いものだ。
育てる食物は一年の四季を通して変わり天候によっても育て方も変わってくる。
また同じ作物でも地域によって栽培時期が異なる。

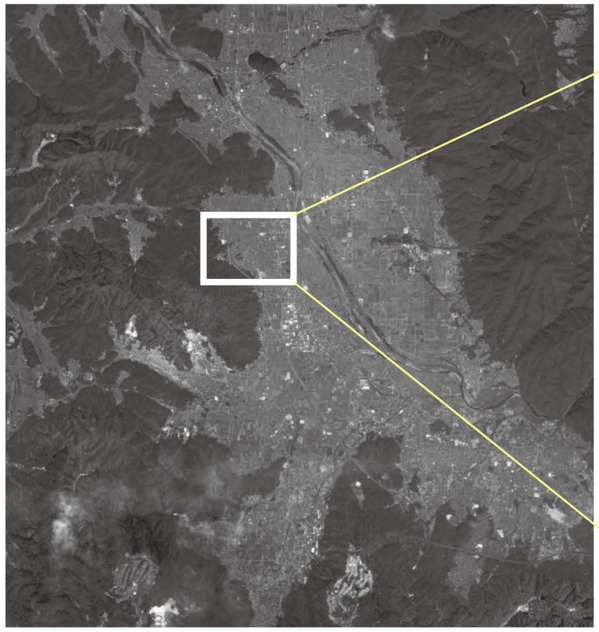
相手が自然のため思い通りにいかないことも多いが
試行錯誤しながらもなんとか収穫に漕ぎ着けた時の喜びは
他の何ものにもかえがたい。また農業をきっかけにして
新しく関わる人たちは十人十色で、そこで築かれるコミュニティは
かけがえのないものである。
しかし現実には農業を継ぐ若者は少なく放棄耕作地は増えている。
昔に比べて収入が変わり農業だけで生活することが難しくなっても
兼業農家という形で今もなお農業を続ける人がいるのは
先代から引き継いだ自分の農地をこれからも守っていきたい
という強い思いがあるからだ。そこで本建築では、農業を志す若い
人たちが新しくやってくる住まいを作る。
若い人たちがやってくることによって農家の人たちは
彼らを新しい労働力として受け入れる。
若い人たちは農業を学ぶとともに
この地域で生活していく中で農業を中心とした
農家の人との関わりを増やし地域の一員となっていく。

PROGRAM

この地域の農地の中で、山がちで将来的に耕作が放棄される可能性を持つ
場所を選び、若者たちに無料で貸し与える。同時に農家の人たちがシェア
ハウス式の住まいを用意し借家として提供する。農機具、農作業機械は
周辺の農家から譲り受けて使用するため農業を始める初期投資がいらず
だれもが農業を始めるきっかけを得られる。
やってくる人の多くは農業未経験者のため地域の様々な農家の人の所へ行き
農業のことについて教わる。そこで学んだことを自分たちの農地で実践し
経験を積んでいく。
一方で農家の人たちにとって彼らは新たな労働力となる。

このように第三者として若い人たちが農業の運営に関わっていく仕組みが
これからの農業のあり方の一つになる。





亀岡市（亀岡盆地）全体写真

設計対象地およびその周辺写真

SITE

京都市の西隣、亀岡市内の農地を計画地とする。

市内中央に国道９号線とそれに並ぶように JR 嵯峨野線
が通っている。これらを中心に街区が形成されている。
今回の敷地は亀岡盆地として知られる山の麓に広がる
棚田、段々畑の一角に位置する。

集落は坂を下った先にある。
そのため近くに住居はなく農地に囲まれた場所である。
この地域の農家は以前は専業農家であったが今現在では
多くが第二種兼業農家である。

RESIDENT & NEIGHBOR

ここへやってくる人々の農業に対するモチベーションは人それぞれ違う。

いつもお世話になっている
農家のおじさん

学校帰りによく遊びにくる
小学生の男の子

採れたての野菜を持ってきてくれる
おばちゃん

学校の帰りに散歩にやってくる
女の子とお母さん

この地域の農家の跡取り息子
この家の住人に対してとても親近感を持っている

６人の住人

赤さん（26 歳）
新しい農業事業のきっかけを探す若者。
まずはこの土地で経験を積んでいく。
この家の農業を中心になって運営する人物。

青さん（31 歳）
前の仕事を辞めて、第二の職業として農業に携わる。
この地域に愛着を持ちこれからもこの地の一員として
長期的に農業に関わっていこうと考えている。

黄色君（20 歳）
農家の跡取り息子。
実家の農業を継ぐ前に他の農業を学んで地域の抱える問題や
様々な種類の農業を知りたいと考えている。

緑さん（34 歳）
レストランのシェフ。
安心して提供できる食材を求めて自分で農業に関わり始めた。
基本的にシェフとして職場に通い、休みの日に皆と一緒に農作業を行う。

橙君（21 歳）
農業をやってみたい大学生。
普段は下宿として住み授業のない日や休みの日に手伝う。
この家のことを知って引っ越してきた。

桃さん（22 歳）
農業系の会社に就職の決まった大学生。
将来の仕事として、また一人の消費者として
食料生産のことを知りたいと思い引っ越してきた。

1：水田（稲作）　春～秋

2：水田（稲作）　春～秋

3：水田（稲作）　春～秋

4：畑　夏、秋
夏　：　なす・トマト
秋　：　さつまいも

5：水田（稲作）　春～秋

6：水田（稲作）　春～秋

7：畑　春、夏、冬
春　：　たまねぎ、じゃがいも
夏　：　きゅうり、スイカ、枝豆
冬　：　キャベツ

8：畑　春、秋、冬
春　：　じゃがいも
秋　：　ネギ
冬　：　白菜

9：水田（稲作）　春～秋

10：畑　春、夏、冬
春　：　たまねぎ、じゃがいも
夏　：　きゅうり、スイカ、枝豆
冬　：　キャベツ

水田：稲作スケジュール

		水田
4月	催芽、種まき 育苗（ハウス内）	用水路の整備、畦塗り 代掻き（3回目） ↓
5月		田植え・肥料やり 除草剤散布 ↓
7月		中干し 肥料やり ↓
9月		稲刈り もみの乾燥、もみすり ↓
10月		新米出荷 ↓
11月		堆肥散布 田起こし ↓
3月		代掻き（2回目）

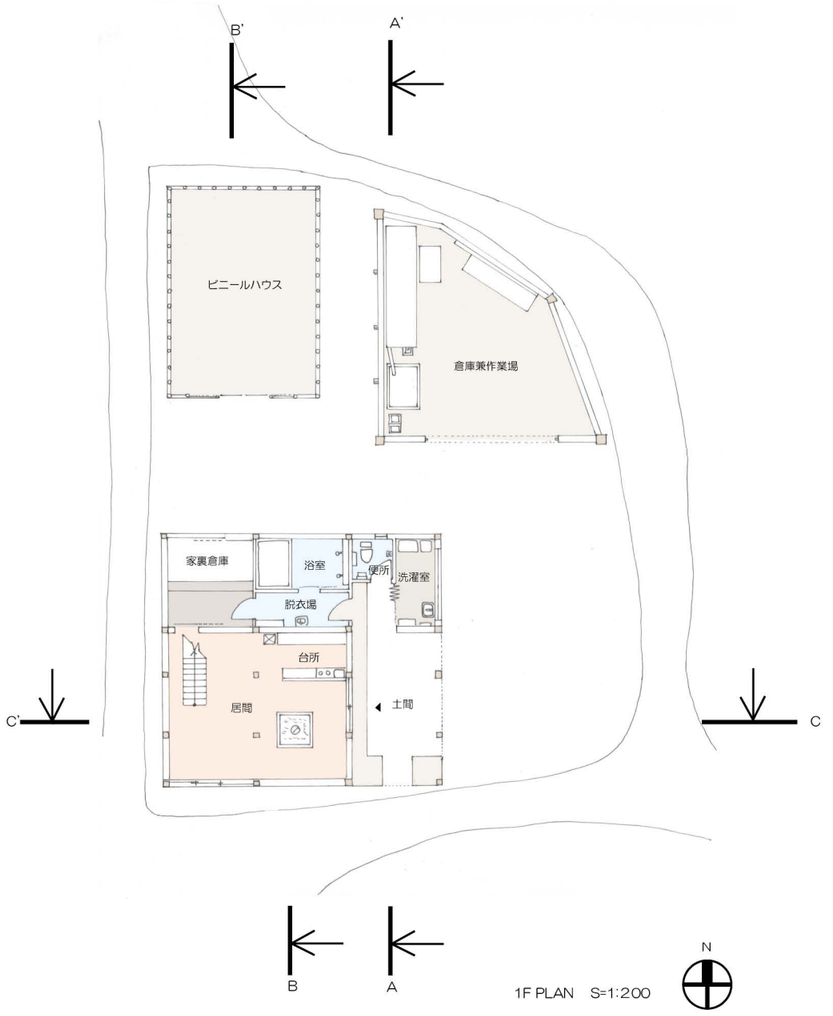
住人が管理するのは 10 箇所の農地。
元々それぞれの田んぼは周辺の農家が管理していたが
管理者の高齢化や世代交代によって耕作放棄予定地と
なっていたため、やってくる住人に管理が任せられている。

N

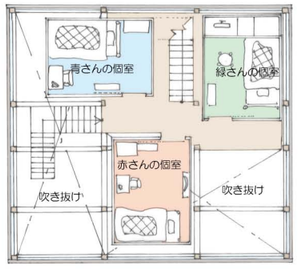
S=1：400

FIELDS

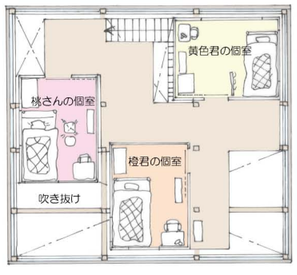
PLAN



1F PLAN　S=1:200



2F PLAN　S=1:200



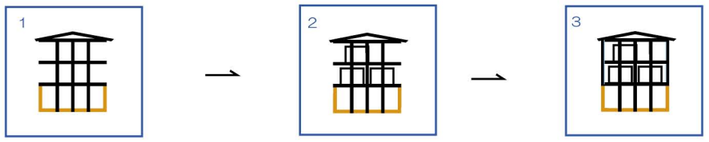
3F PLAN　S=1:200

DIAGRAM

1 階には柱と壁、2階より上には
壁はなく柱梁があるだけ

個室となる白いキューブを
梁の上に挿入する

外側にガラス、さらに外に
木製のルーバーを取り付ける



設計を行った敷地は耕作地として利用されているわけではなく
空き地であった場所を選んだ。
建物 1 階は共用部、2階から上が個人の空間となっている。

農作業をして衣服が汚れるため玄関先に半屋外空間の
土間を設ける。土間内は外履きのまま生活し
洗濯室や便所にも履き替えずにアクセスできる。

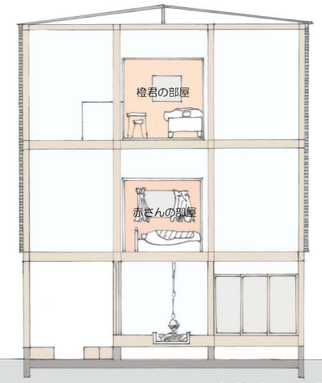
玄関先には腰掛けられる高さの段がある。
来客があったときにはここに腰掛けて話をしたり
農作業の途中の休憩なら靴を脱がずにここで一休みできる。

2階、3階は必要な機能を小さく収めた個室空間が続く。
柱梁と白いキューブが吹き抜けによって繋がれる。

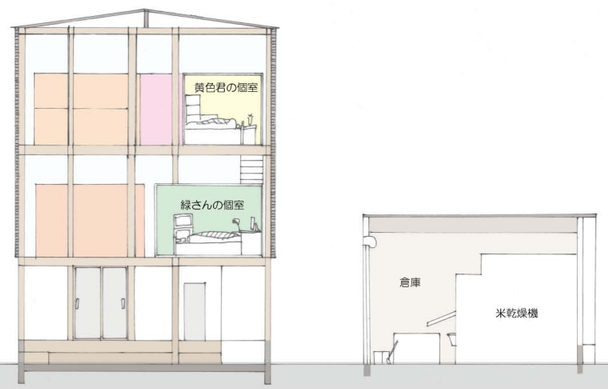
2階より上のルーバーは全方向に渡って施されており
農地の四季の移ろいを見てとることが出来る。
夜になると室内の明かりがルーバー越しに外に漏れ出て
白いキューブがシンボリックに浮かび上がる。

SOUTH ELEVATION S=1:200

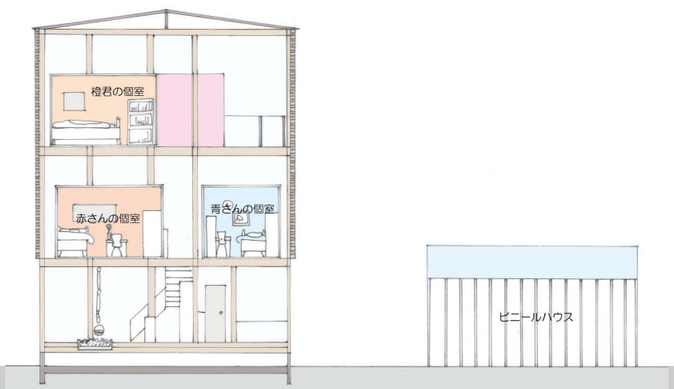
EAST ELEVATION S=1:200



C-C' Section S=1:200



A-A' Section S=1:200

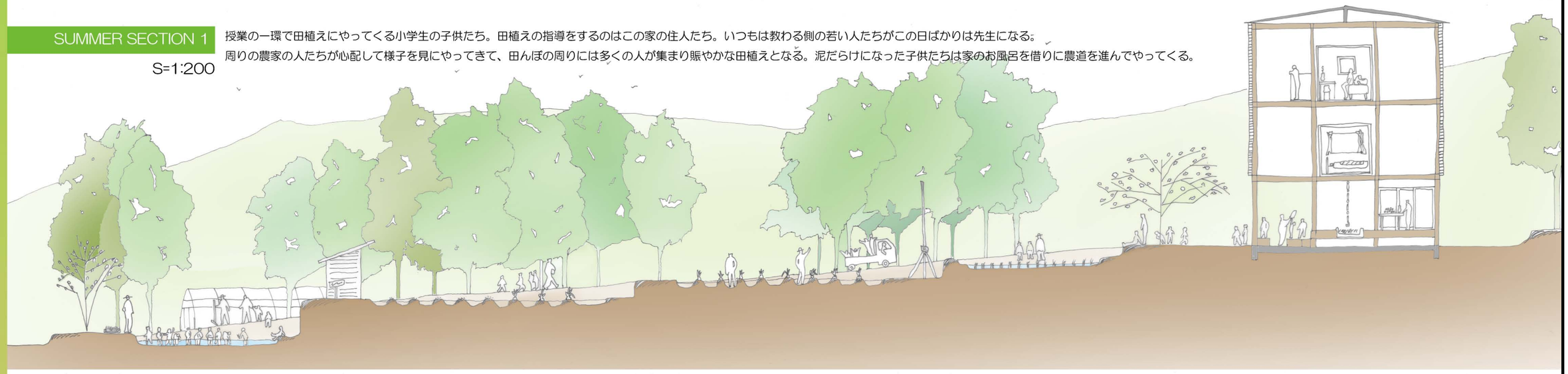


B-B' Section S=1:200

SUMMER SECTION 1

S=1:200

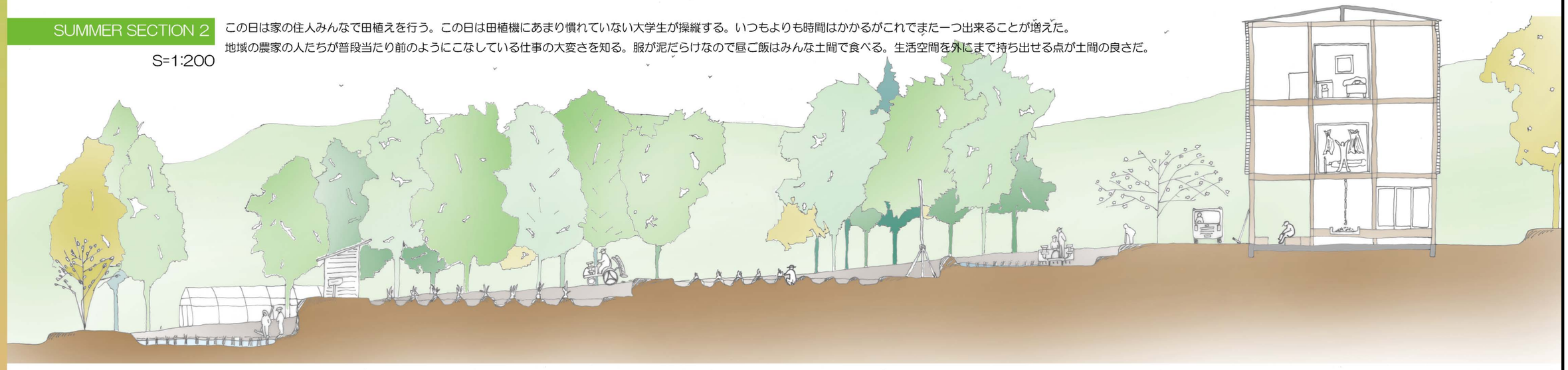
授業の一環で田植えにやってくる小学生の子供たち。田植えの指導をするのはこの家の住人たち。いつもは教わる側の若い人たちがこの日ばかりは先生になる。
周りの農家の人たちが心配して様子を見にやってきて、田んぼの周りには多くの人が集まり賑やかな田植えとなる。泥だらけになった子供たちは家のお風呂を借りに農道を進んでやってくる。



SUMMER SECTION 2

S=1:200

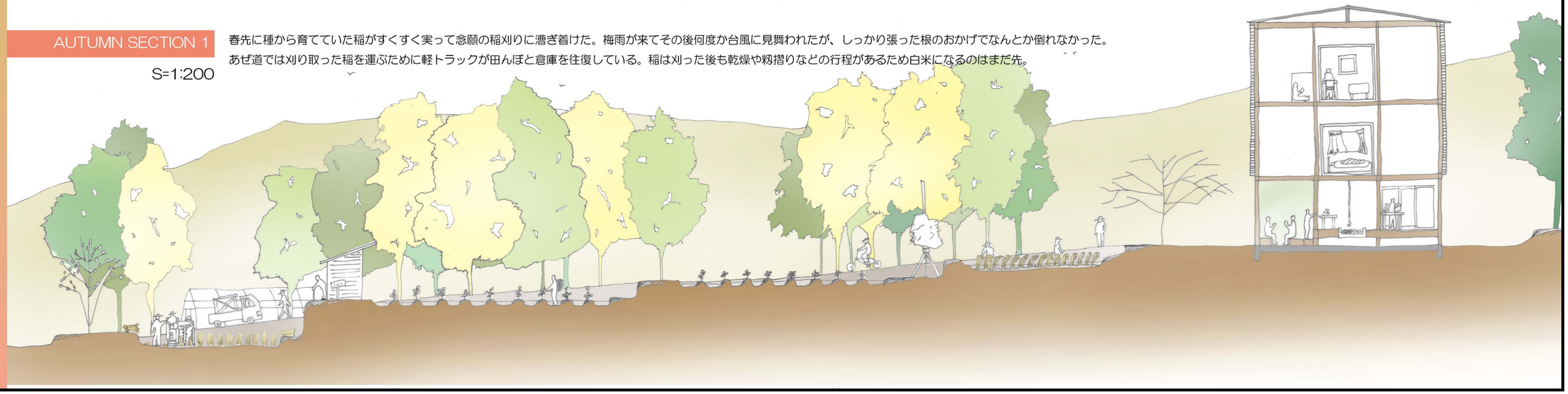
この日は家の住人みんなで田植えを行う。この日は田植機にあまり慣れていない大学生が操縦する。いつもよりも時間はかかるがこれでまた一つ出来ることが増えた。
地域の農家の人たちが普段当たり前のようにこなしている仕事の大変さを知る。服が泥だらけなので昼ご飯はみんな土間で食べる。生活空間を外にまで持ち出せる点が土間の良さだ。



AUTUMN SECTION 1

S=1:200

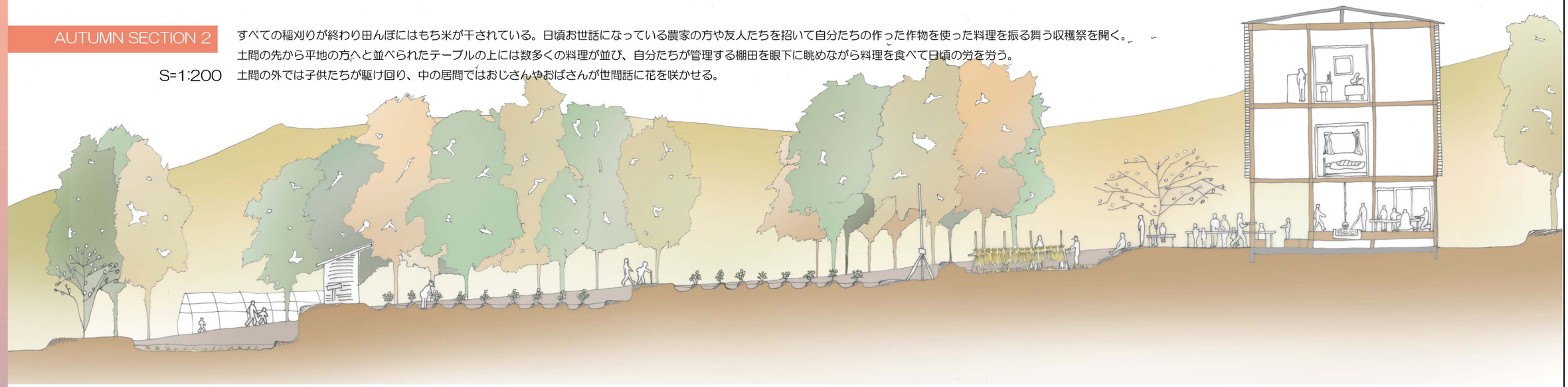
春先に種から育てていた稲がすくすく実って念願の稲刈りに漕ぎ着けた。梅雨が来てその後何度か台風に見舞われたが、しっかり張った根のおかげでなんとか倒れなかった。
あぜ道では刈り取った稲を運ぶために軽トラックが田んぼと倉庫を往復している。稲は刈った後も乾燥や籾摺りなどの行程があるため白米になるのはまだ先。



AUTUMN SECTION 2

S=1:200

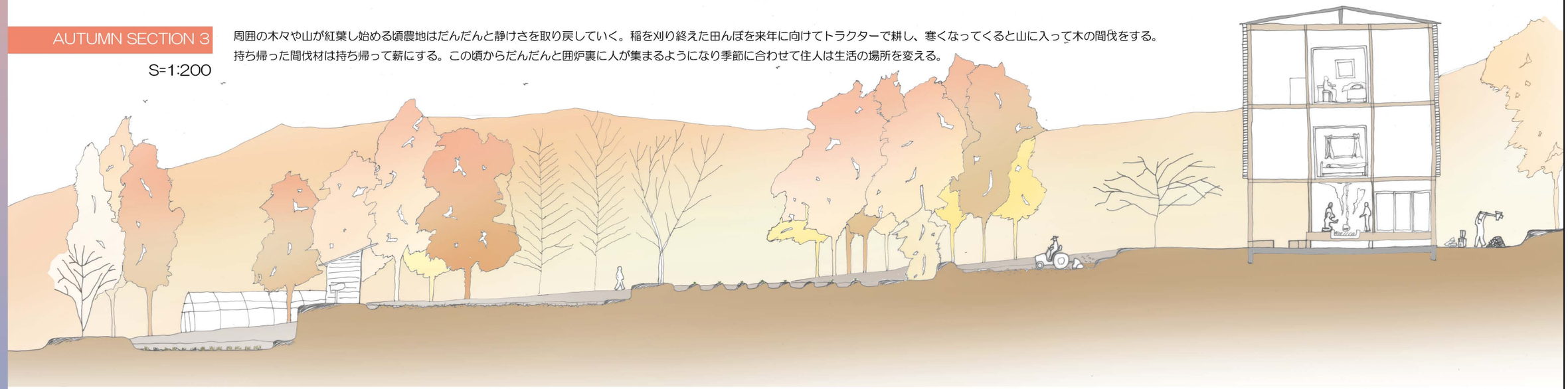
すべての稲刈りが終わり田んぼにはもち米が干されている。日頃お世話になっている農家の方や友人たちを招いて自分たちの作った作物を使った料理を振る舞う収穫祭を開く。
土間の先から平地の方へと並べられたテーブルの上には数多くの料理が並び、自分たちが管理する棚田を眼下に眺めながら料理を食べて日頃の労を労う。
土間の外では子供たちが駆け回り、中の居間ではおじさんやおばさんが世間話に花を咲かせる。



AUTUMN SECTION 3

S=1:200

周囲の木々や山が紅葉し始める頃農地はだんだんと静けさを取り戻していく。稲を刈り終えた田んぼを来年に向けてトラクターで耕し、寒くなってくると山に入って木の間伐をする。
持ち帰った間伐材は持ち帰って薪にする。この頃からだんだんと囲炉裏に人が集まるようになり季節に合わせて住人は生活の場所を変える。



WINTER SECTION

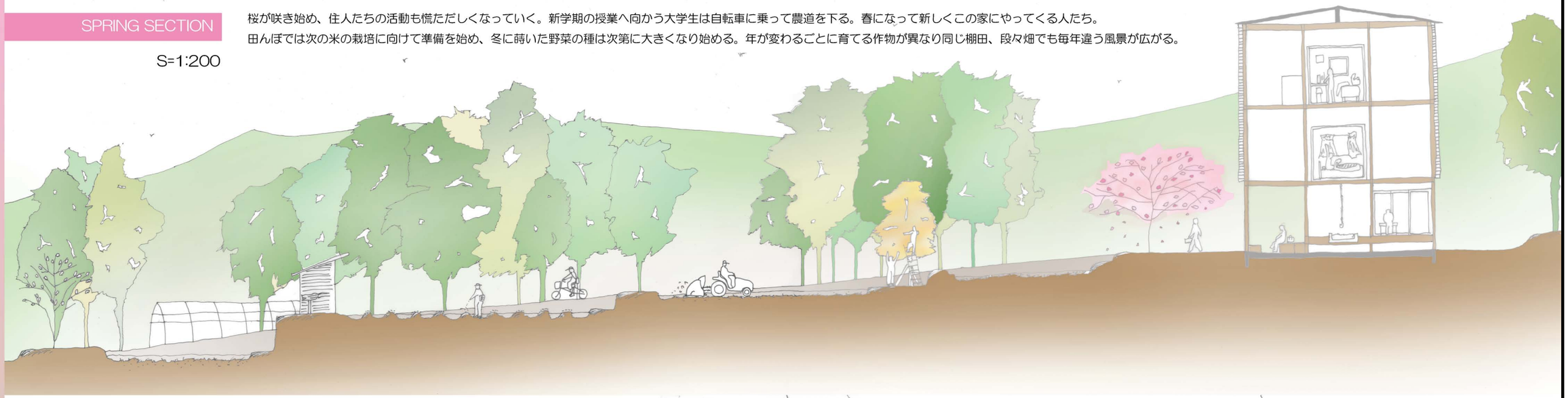
S=1:200

雪が田んぼにうっすらと積もる頃、農閑期を迎え田畑はひっそりと静まり返る。秋に収穫したもち米を使ってみんなで餅つきをする。
冬の寒空の中土間の前で大人から子供までみんなが餅をつく。室内ではお皿を出してならべたりと慌ただしく食べる準備をする。

SPRING SECTION

S=1:200

桜が咲き始め、住人たちの活動も慌ただしくなっていく。新学期の授業へ向かう大学生は自転車に乗って農道を下る。春になって新しくこの家にやってくる人たち。
田んぼでは次の米の栽培に向けて準備を始め、冬に蒔いた野菜の種は次第に大きくなり始める。年が変わるごとに育てる作物が異なり同じ棚田、段々畑でも毎年違う風景が広がる。



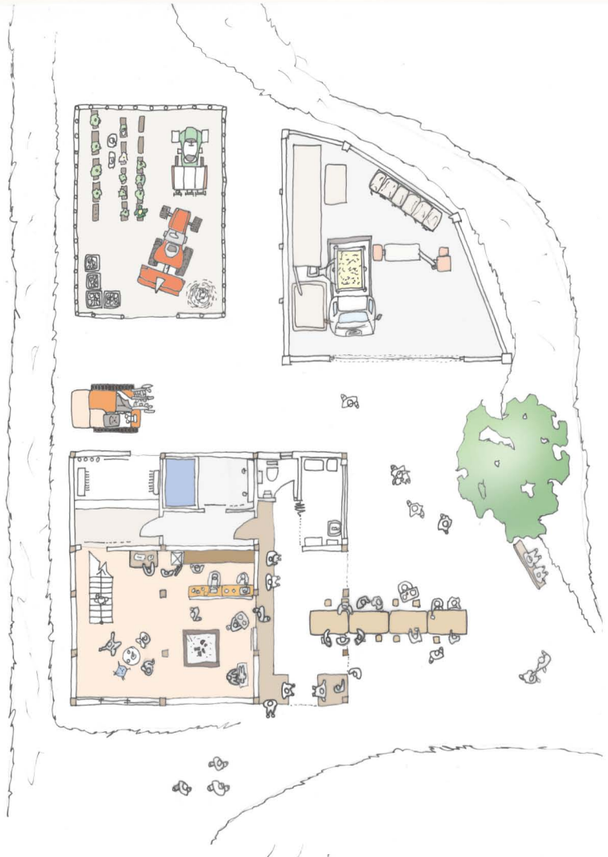
SEASON PLANS

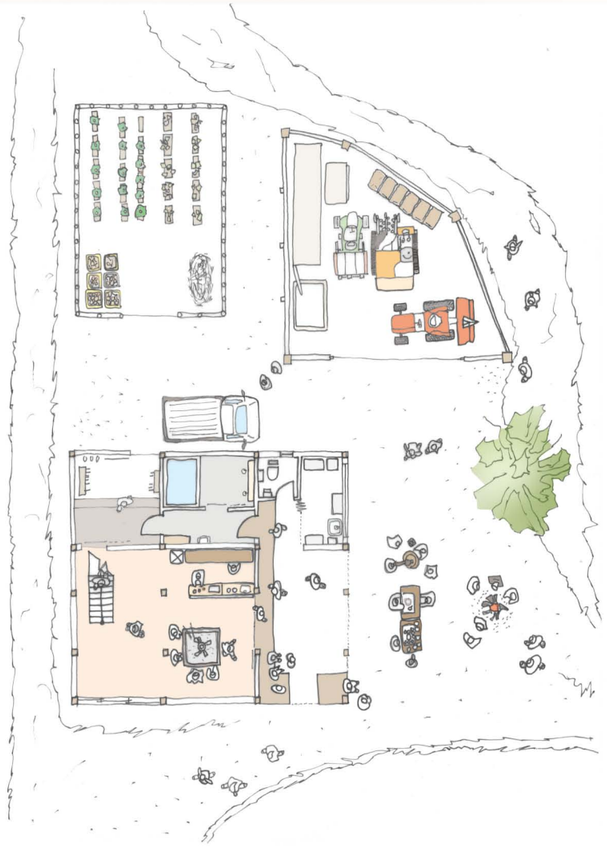
S=1:200

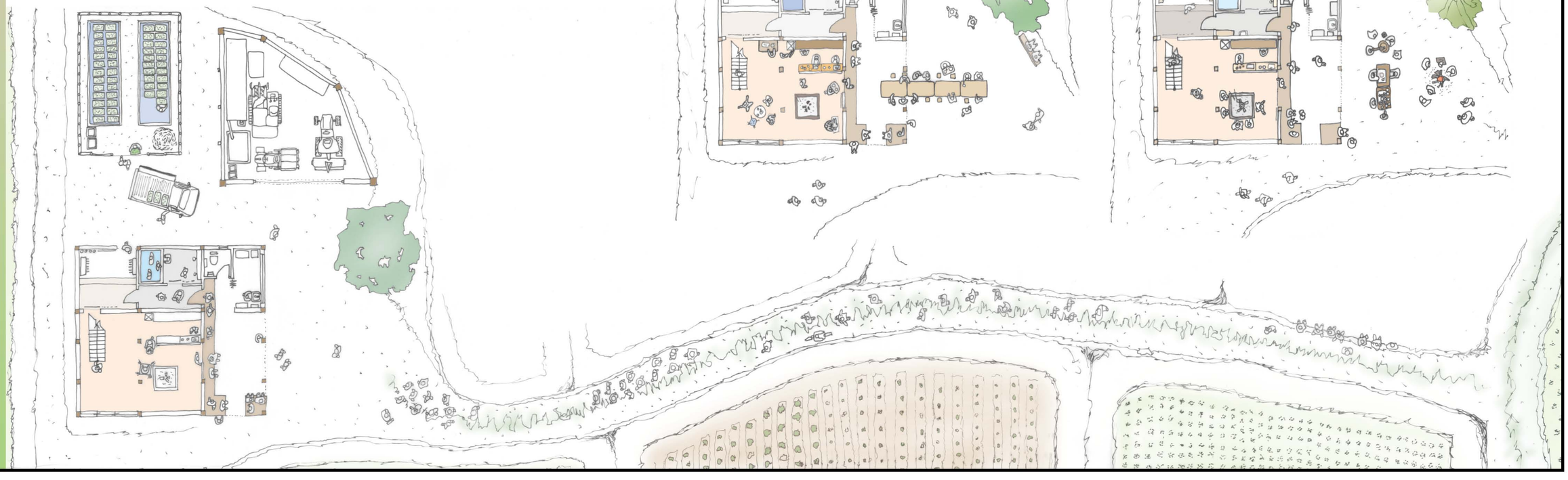
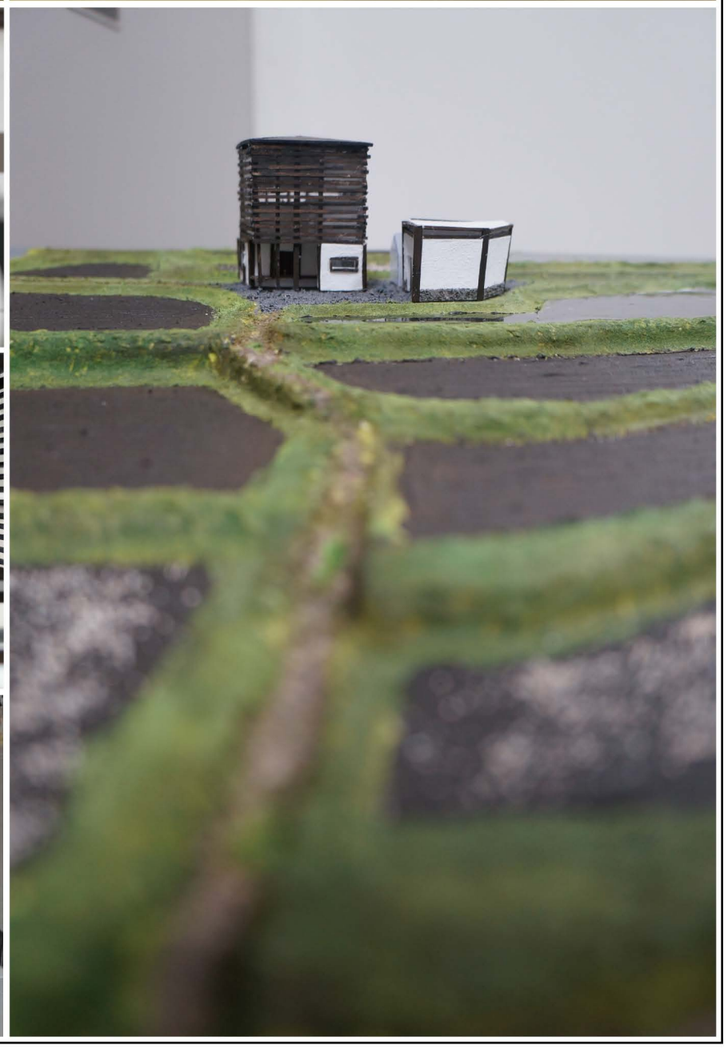
（左図）田植えのときの平面：裸足で田んぼに入って田植えで泥だらけになった子供たちは若者たちの家でお風呂場を借りる。土間から直接脱衣場へと入れるため床を汚すこともなく合理的な作りだ。

（中央）収穫祭のときの平面：土間の先に大きな食卓を作りそこで会が開かれる。土間があることによって外から内への境界が曖昧になり住居部分の広さ以上に広く感じられる。

（右図）餅つきのときの平面：ほとんどの行為が土間の外で行われるが土間の段差があるとそこでは荷物を置くことも出来るし横に座ったり向かい合ったりして話すことも出来る。こんな場所があるおかげで用がなくても人がふらっと立ち寄りやすい場所となっている。







PHOTO